

# 『歴史言語学』第7号の発刊に寄せて

日本歴史言語学会会長

菊澤 律子

ここに、『歴史言語学』第七号をお届けできる運びとなり、心から嬉しく思っております。今年は全国的に災害が続き、当たり前のことが当たり前に繰り返されることがいかに貴重であるのかを、改めて認識させられる年となりました。その中で、こうして学会誌を発行し、大会で配布できる運びとなったのは、ひとえに、会員の皆様、そして運営を担当して下さっている理事の皆様のご尽力のおかげと、心より感謝しております。被災された方々におかれましては、一日も早く、落ち着いた日常が戻りますように、お祈り申し上げます。

日本歴史言語学会は、所属機関や対象とする言語の枠を超え、また、隣接他分野を含む研究者の交流の場となることを目標に発足して以来、より良い方向を目指して、少しずつ前に進んできてまいりました。その試みのひとつとして、昨年の大会では、はじめてシンポジウムを企画・開催し、今号ではその内容を特集としてお届けしております。私自身も、その一部を執筆させていただきましたが、その中で、自分の専門領域では基礎的だと考えられている事柄が、歴史言語学という同じ分野においても必ずしも共有されていないことを再認識させられました。そして、二十年近く前に、はじめて自分の専門領域外の研究者を対象に研究発表をしたときのことを思い出しました。

私が専門としているオーストロネシア語族を対象とした系統研究は、文字による記録のない言語に比較方法の手法を適用した成功例としてよく知られています。比較方法 (the Comparative Method) とは、音対応に基づいて言語間の系統関係の特定と下位分類を解明し、祖語を再建するための、歴史言語学における伝統的な手法のことをいいます。主たる議論の場である国際オーストロネシア言語学会および国際オセアニア学会では、この語族にみられる言語的な特徴や比較再建の手法が、参加者に共有されているものとして話が進みます。一方で、その外の世界に出ようとすると、自分の専門領域で前提となっている知識をわかりやすく説明できることが要求されます。これには、自分の専門を理解しなおし、わかりやすく説明する、という努力を伴いますが、その結果、学び、得られるもの大きいと感じてきました。

たとえば、インド・ヨーロッパ語族を対象とする研究者と統語構造の歴史変化に関する共同研究をしたときには、文献からデータを集めることが可能であり、かつそれが前提となっていることが目新しく、驚きました。オーストロネシア語族を対象とした研究では、通常、現在話されている言語の記述資料を探し、比較するところから始めるからです。共同研究を進める中で、比較再建した内容を検証するために植民時代の文献を使うことができるのではないか、という指摘をいただき、なるほどと思いました。逆に、印欧語の研究では、文献

データのギャップを比較再建により埋める工夫をしてみてもよいのでは、と感じたりもしました。

歴史言語学で対象とされる言語現象が広がるにつれ、語族を超えた学术交流の機会も増えてきたように感じています。単に系統関係を解明するだけでなく、言語変化のパターンやその本質を理解するために、社会言語学はもちろんのこと、理論文法や言語習得など、関連領域の成果も積極的に取り入れられるようになってきました。さらに、認知科学や脳科学などとの連携や、計量的な手法もみられるようになってきています。他分野、他領域の成果や考え方、手法に触れることが、これまで以上に重要視され、大切になってきているといえるでしょう。

今号には、研究論文「言語分析における『ゼロ』概念の意義をめぐって」、フォーラムには、『聾啞方言地図』の布置: 聾啞方言群における音韻変化と概念編制」が掲載されています。あまり馴染みのないトピックだと感じられる方も多くいらっしゃるかもしれませんが、もしかしたらそこに、新しい研究手法やものの見方へのヒントがあるかもしれません。ぜひ、目を通してみていただければと思います。

毎年お届けする『歴史言語学』が、異分野や異領域との研究交流の場となるならば、学会として、この研究分野を発展させてゆくための機能を果たすことができているのではないかと思います。今後もぜひ、会員の皆様からの積極的かつ多様な投稿をいただき、歴史言語学の交流の場としてゆくことができればと思います。

2018年11月

バルセロナに向かう機中にて